山東系の一方音について

潘さんは、旅順郊外雙島灣安嶺屯生れの二十餘歳の學生である。一昨年奉天醫科大學に入學するまでは、未だかつて他鄕に住んだことが無かつた。その部落の人々の先祖たちは、數百年前に戰亂を避けて山東省から移住して來たものである由。素朴な農村で、支那人の他の部落と同樣、大家族生活を營んでゐる。近年山東地方から滿洲へ渡來する人々の言語は、自分たちのものとは既にかなり違つたものになつてゐると、潘さんは言ふ。私が潘さんと交際する機會を得たのは、一昨年の大晦日から約半年の間、鎌倉に於てのことであつた。私は支那語は話せないけれども、北京官話については、大學在學中に竹田先生や張・關兩先生から御教を受け、初歩の知識は持つてゐるので、それと比較して潘さんの言語の方言的特色につき若干の考察を試みた。

潘さんの言語は、無論北音系統に屬するもので、北京官話とは大同小異である。但し、四聲にはかなり特色がある。陰平は、低い降調であつて、末尾が微かに昇る。青島あたりの方言でも、陰平は低い降調であるといふことを、その地に四五年住んだことのある或支那人の口眞似によつて知ることが出來た。これは、北京官話の陰平が、略平で、微かに降る傾向を示すに過ぎないのとは、大いに相違してゐる。次に、陽平は、高く平で、微かに昇る傾向を示す程度のものである。北京官話の陽平のやうに鋭く昇るのではない。上聲は、低くて末尾が昇るのであるが、北京官話の場

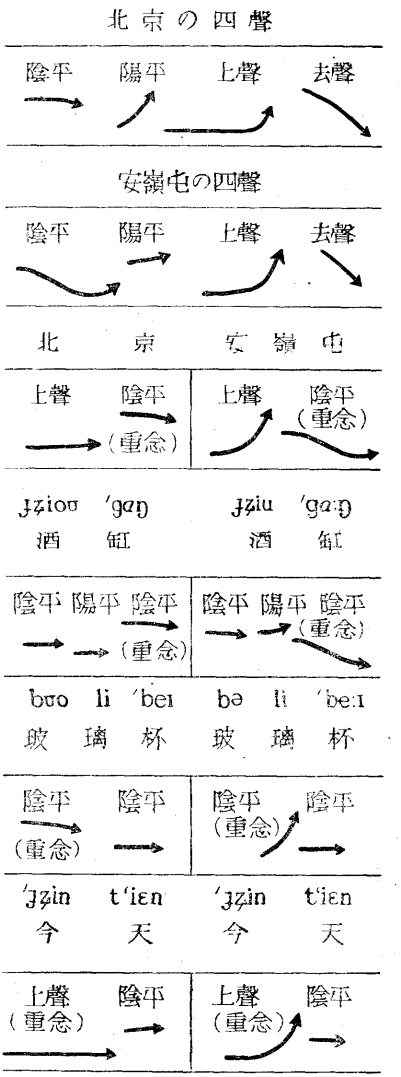
合程には長くない。去聲は、高い所から降る。北京官話の場合と略同じことであるが、それよりもいくらか短く、降りやうも少いかと思はれる。入聲は無く、古の入聲はすべて陰平・陽平・上聲・去聲のいづれかに轉じてゐる。但しその分れ方は、現代北京官話の狀態とは餘程違つてゐる。殊に、數詞の一・七・八や否定辭の不が上聲であることなどは注意すべきで、この點では安嶺屯音は中原音韻と一致してゐる。もつとも、すべての點で中原音韻と一致してゐるわけではない。

全體として見ると、陰平・上聲は低くて長く、陽平・去聲は高くて短い。

陰平の最も主要な特色は、低くて降ることである。末尾の微かに昇る部分は、實際は明瞭に發音されない場合も多い。陰平の低いことは、北京官話に比する時は、極めて顯著なものである。例へば、「酒缸」と言ふ場合、北京官話ならば、「缸」(陰平)の始まりは「酒」(上聲)の終りよりも高い所から起るのであるが、安嶺屯音では、前者が後者よりも低い所から起るのである。又「玻璃杯」と言ふ場合、北京官話ならば「杯」(陰平)が最も高く「璃」(陽平)が最も低いのであるが、安嶺屯音では、却つて「璃」が最も高く「杯」が最も低いのである。(これらは勿論、機械による精密な實驗の結果に就いて言ふのではなく、耳で聽いた大體の感じを言ふのである。以下も同樣である。)

又、「星期」「今天」のやうに陰平音節が二つ重る場合には、その第一音節は、北京官話の陽平に似た鋭い昇調となる。

北京官話の上聲は、他の音節の前に來る場合には、末尾の昇る部分が消えて、單なる低く長い平調となる。これを趙元任氏は「賞半」(賞聲卽ち上聲の半分の意)と呼び、汪怡氏等は「半上聲」と呼んでゐる。然るに、安嶺屯の上聲



は北京官話の程長からず、且その昇り口に力を入れて「猛烈强」に呼ばれ、次に他の音節が續く場合でも昇調たることを失はない。例へば「眼睛」の「眼」は、北京官話では低く長い平調であり、「睛」の始まりは「眼」の終りよりも高い所から起る。然るに、安嶺屯音では「眼」は「眼睛」の場合でも昇調たることを失はず、その際「睛」の始まりは「眼」の終りよりも低い所から起るのである。

「五百」「洗臉」のやうに上聲音節が二つ重る場合、その第一音節が陽平に變ることは、北京音も安嶺屯音も全く同じことである。

安嶺屯方言の特色として殊に顯著なのは、〔z̩〕音を全然缺いてゐることである。卽ち、日母の頭音はすべて消失して、その結果、音節は〔i〕〔y〕の如き前舌母音で始まる形になつてゐる。卽ち、

北京	安嶺屯	例
〔ʐan〕	〔iɛn〕	然・染
〔ʐaŋ〕	〔iaŋ〕	壤・讓
〔ʐau〕	〔iau〕	擾・繞
〔ʐə〕	〔iɛ〕	熱
〔ʐən〕	〔in〕	人・認
〔ʐʅ〕	〔i〕	日
〔ʐou〕	〔yo〕	惹・弱
〔ʐou〕	〔iu〕	柔・肉
〔ʐu〕	〔y〕	乳・入
〔ʐuan〕	〔yan〕	軟
〔ʐu(ə)n〕	〔yin〕	閏・潤
〔ʐuŋ〕	〔iuŋ〕	戎・冗

但し、稀には、北京音の〔ʐ〕に對應する所に、安嶺屯音が〔l〕を持つてゐる場合もある。卽ち、仍・蕊・銳の如きは、北京音では各〔ʐəŋ〕〔ʐuei〕〔ʐuei〕であるが、安嶺屯音では各〔leŋ〕〔luei〕〔lei〕の形になつてゐる。

日母頭音の消失が、獨り安嶺屯方言のみならず、一般山東系諸方言に共通の特色であることは、山東地方に居住し又はその地方を旅行したことのある支那人たちの證言の一致する所である。但し、必ずしも山東系のすべての方言に

〔ʐ〕音が皆無であるといふわけではないらしい。土屋明治氏の「地方音の研究」(支那語學報創刊號所載)に據れば、濟南方言では、語により、上の安嶺屯音に似た形を持つものと、北京音に似た形を持つものとが、共に存在するやうである。

次に、カールグレン氏は、支那諸方言に存する〔dʐ〕〔tʂ'〕〔ʂ〕〔ʐ〕類の子音を、その構成位置に從つて二類に分ち、歸化・大同・文水・興縣(以上山西)蘭州・平涼・涇州(以上甘肅)西安・三水(以上陝西)懷慶(河南)諸方言のものを apico-advéolaire となし、北京・開封・南京諸方言のものを apico-prépalatal となした。安嶺屯方言の〔dʐ〕〔tʂ'〕〔ʂ〕は、大體前者に屬するものと忍はれる。北京官話の音に比すれば、cerebral の度が稍少く、齒緣に於ける摩擦が一層明瞭である。

正齒音・細正齒音二等に於ては、北京音は大多數の場合〔dʐ〕〔tʂ'〕〔ʂ〕を持ち、一小部分(縮・朔・阻・疎・所・疏・襯・瑟・責・策・搜・森・澁・仄・測・色)にのみ〔dz〕〔ts'〕〔s〕の形を持つてゐる(その中、朔・襯・色には〔dʐ〕〔tʂ'〕〔ʂ〕の形もある)のであるが、安嶺屯音では、崇・縮・雙・捉・朔・師・衰・士・事・史・阻・詛・初・楚・助・疎・所・疏・雛・數・齋・豺・債・釵・柴・曬・臻・襯・瑟・棧・山・產・殺・刷・札・察・爪・抓・抄・巢・梢・稍・叉・沙・莊・壯・瘡・牀・狀・霜・爽・生・省・爭・責・策・皺・愁・搜・瘦・森・澁・斬・揷・衫・仄・測・色など全部〔dz〕〔ts'〕〔s〕の音である。

正齒音・細正齒音三等に於ては、北京音は全部〔dʐ〕〔tʂ'〕〔ʂ〕を持つてゐる。安嶺屯音も大體はさうであるけれど、通攝一般(終・充・叔・塾・鐘・衝・燭・觸・束・蜀等)・止攝一般(支・枝・之・芝・止・脂・紙・志・至・齒・匙・詩・時・示・是・吹・垂・睡・錐・水・誰等)及び臻攝合口の一部には〔dz〕〔ts'〕〔s〕の形が現れてゐる。臻

攝合口の音の中では、穿母の春・蠢・出が〔tʂ〕を持ち、その他は準〔dz〕脣・鶉・純〔ʂ〕楯・術〔ʂ〕順・舜〔ʂ〕の如くである。通攝の中では、粥だけが北京音・安嶺屯音共に〔dʐou〕である。併し、音韻法則は、當然、北京音〔dʐu〕（實際、讀書にはこの形が用ゐられる）安嶺屯音〔dzu〕を要求する所なので、〔dʐou〕はいづれにしても不規則な形である。

舌上音二等に於ては、北京音は殆どすべての場合〔dʐ〕〔tʂ〕を現してゐるが、安嶺屯音は臬・濁・罩・棹・茶・宅・摘など皆〔dz〕〔ʂ〕の形である。

舌上音三等に於ては、北京音は常に〔dʐ〕〔tʂ〕をのみを現してゐる。安嶺屯音も大體はさうであるけれど、通攝一般（中・蟲・竹・逐・重・躅等）及び止攝合口一般（追・槌・墜等）には〔dz〕〔ʂ〕の形が現れてゐる。但し正齒音の場合とは違つて、止攝開口では安嶺屯音も全部〔dʐ〕〔tʂ〕を表して居り、又臻攝合口の椿も北京音・安嶺屯音共に〔tʂ〕の形である。

北京音で〔dʐ〕〔tʂ〕の形を持つてゐる音節の中で、止攝の正齒音に屬するもの（支・枝・之・芝・止・脂・紙・志・至・齒・匙等）は安嶺屯音では〔dzɿ〕〔ʂɿ〕の形であり、止攝の舌上音（知・蜘・峙・致・雉・稚・治・置・池・馳・持・遲・耻等）及び臻攝（質・秩・叱等）深攝（執・汁等）梗攝（隻・赤・斥等）曾攝（織・職・直・敕・勅等）の入聲に屬するものは安嶺屯音では〔dʐɿ〕〔tʂɿ〕の形である。

又、北京音で〔ʂ〕の形を持つてゐる音節の中で、止攝に屬するもの（詩・施・時・史・使・矢・始・是・士・示・視・市・事等）は安嶺屯音では〔ʂɿ〕の形であり、蟹攝（世・誓等）及び臻攝（實・室等）深攝（十・濕等）梗攝（石等）曾攝（食・識等）の入聲に屬するものは安嶺屯音では〔ʂʅ〕の形である。

カールグレン氏の調査の結果に照して見ると、現代支那諸方言の中で、正齒音・細正齒音・舌上音の系統に屬する字音の狀態に於て、この安嶺屯方言と類似の形を現してゐるものは、山西省の歸化・文水・興縣諸方言である。但しそれらの方言では、遇攝（猪・除・諸・處・書・署・住・主・輸・殊等）及び山攝合口（轉・傳・專・川・船・拙・說等）に於ける正齒音・細正齒音・舌上音三等までが全部〔dʐ〕〔tʂʿ〕〔ʂ〕の形になつてゐるのであるが、安嶺屯方言はそれらの位置には（拙〔dʐuo〕を除く外）一般に〔dʐ〕〔tʂʿ〕〔ʂ〕を現してゐる。又、歸化・文水興縣等では臻攝合口の椿・準・春・蠢・脣・順・純・出・術等が全部〔dʐ〕〔tʂʿ〕〔ʂ〕の形になつてゐるのであるが、安嶺屯ではその中の椿・春・蠢・順・出等が〔tʂʿ〕〔ʂ〕の形であること、既述の通りである。

潘さんの話に據ると、南滿洲の或土地、例へば貔子窩あたりの人は、安嶺屯の〔dʐʔ〕〔tʂʿʔ〕〔dʐu〕〔tʂʿu〕に相當する音節を〔ʨʔi〕〔ʨʿi〕〔ʨʔy〕〔ʨʿy〕のやうに發音するが、これも潘さんにとつては耳馴れた響である由。潘さん自身も、喫（吃）などは普通に〔ʨʿi〕と言つてゐる。もつとも、喫は（既に中原音韻に於て尺・赤等と同音の扱になつてはゐるものの）唐韻苦擊切であつて、本來は牙音系統の字であるから、安嶺屯音としては、〔ʨʿi〕は〔tʂʿʔ〕より寧ろ規則正しい形とも見られるのである。

次に、北京官話の〔ʨ〕〔ʨʿ〕〔ɕ〕の中には、昔の〔g〕〔kʿ〕〔x〕の口蓋化されたもの（幾・家・江・君・氣・强・羣・喜・下・香・薰の類）と、昔の〔dz〕〔tsʿ〕〔s〕の口蓋化されたもの（濟・將・俊・七・槍・西・相・旬の類）とが含まれてゐる。現代の山東系諸方言の中の或者は、前者を未だ〔g〕〔kʿ〕〔x〕に近い形で保存し、後者から區別してゐるやうに聞いてゐる。併し、安嶺屯方言では、北京官話の場合と同樣、すべてが〔ʨ〕〔ʨʿ〕〔ɕ〕であり、牙喉音系統のものと齒音系統のものとの間には何ら區別が無い。

なほ、安嶺屯方言では、疑母の頭音〔ŋ〕が〔n〕に變じた二三の例を除き）全部消失してゐること、北京官話の場合と同じことである。

安嶺屯音では、鳥は、普通には〔niau〕よりは寧ろ〔miau〕と言ふ。又、寺は、〔sɿ〕ではなくて〔dzɿ〕である。食には、食指〔tʂʔ dzɿ〕日食〔i sʔ〕のやうに、二樣の音（いづれも陽平）がある。踏は、脚踏子〔tʂyo dza dzɿ〕脚踏車〔tʂyo dza tʂʔ〕のやうに、常に〔dza〕（陰平）と呼ばれる。北京官話では〔tʂA〕（去聲）である。

韻形に就いて見ると、通・梗・曾攝に於て、北京官話の〔uŋ〕（公・東・弓・中・從・轟・洪等）及び〔uoŋ〕（翁・甕等）に對應する所には、安嶺屯方言は常に〔oŋ〕を現してゐる。この〔o〕は、獨逸語の Kopf の o に近い開音である。又、北京官話の〔iuŋ〕（容・用・永・榮・窮・熊・雄・兄等）に對應する所には、安嶺屯方言は常に〔iuŋ〕を持つてゐる。その中、窮・熊・雄・兄のやうな場合には、北京官話の〔ɕiuŋ〕〔ɕiuŋ〕に於ては、〔i〕は唇に圓味を帶びて〔y〕に近く發音されるのが普通であるけれど、安嶺屯音の〔ɕiuŋ〕〔ɕiuŋ〕にはこの傾向が少く、殊にゆつくり發音する場合には、チーウング・シーウングの如く、明瞭な〔i〕の形で現れて來る。なほ、例外的の場合として、松は北京音〔sʊŋ〕安嶺屯音〔ɕiuŋ〕である。

止攝の日母に屬する二。耳・兒の類は、安嶺屯音〔er〕であつて、北京官話の音と大差は無い。但し、北京官話の音については、カールグレン氏は唇に輕微な圓味を認め、趙元任氏等は之を認めてゐないが、潘さんの安嶺屯音では、唇の圓味は少しも認められない。末尾の〔r〕は、北京音でも安嶺屯音でも大差無く、卽ち、英語の所謂摩擦音〔r〕に似て、恐らく一層 cerebral な音である。なほ、兒が他の音節の下に着いて「一會兒」「一點兒」「地方兒」のやうな形を作る場合、〔i xuer〕〔i dier〕〔di far〕等のやうに發音されることは、安嶺屯方言でも、北京官話の場合と同

じことである。

止攝及び蟹攝の合音に現れる〔uei〕韻（爲・未・貫・追・水・會・回・歲等）は、速く發音される場合には〔ui〕となる。もつとも、爲・未のやうに頭音の無い音節は、大抵は〔uei〕であつて、〔ui〕になることは稀である。その他の〔guei〕〔[illegible]〕等の音節は、陰平・上聲では〔uei〕と發音され、陽平・去聲では〔ui〕と發音されることが多い。併し、要するに、〔uei〕と〔ui〕との間には明瞭な區別が無く、實際の發音は〔uei〕〔uëi〕〔ui〕の間を動搖してゐるのである。以上は安嶺屯方言についての話であるが、北京官話では陰平・陽平〔ui〕上聲・去聲〔uei〕が最も普通な形である。

北京官話で〔duei, dui〕〔t'uei, t'ui〕の音を有する推・對・隊・頹・腿・退の類は、安嶺屯方言では、別に〔dei〕〔t'ei〕の形をも持つてゐる。〔dei bu dei〕（對不對）〔dei le〕（對了）の如し。

なほ、安嶺屯方言には、北京官話に缺けてゐる所の〔uei〕といふ音節が有る。卽ち、北京官話で〔zuei〕と言ふ所の惴の字の音がこれである。

二重母音〔ei〕（杯・配・美・費・內・類・給等）は、北京官話では屢〔ëi〕に傾く。同じ傾向が、安嶺屯方言では殊に去聲の場合に著しい。（〔ei〕〔uei〕の〔e〕は、北京音でも安嶺屯音でも、いづれも大體 middle e である。）

北京官話及び安嶺屯方言に於て、止攝の脣音は、開口系統のものは〔i〕韻を有し、合口系統のものは〔ei〕韻を有するのを原則とする。然るに、脣音の開口と合口との間には、古來混亂が相當多い。例へば、彼は、唐韻補委切であつて、本來は合口系統の音節であるに拘らず、現代北京音は〔i〕である。之に對し、安嶺屯音は〔bei〕（彼此彼此〔bei tsi bei tsi〕）であつて、卽ちこの場合は、規則正しい合口の形を現してゐる。

蟹攝等に於て、北京官話の〔ai〕（愛・開・來・拜・買等）に對應する韻は、安嶺屯方言では〔Ai〕である。但し、陽平に於ては、二重母音の第一要素が、〔e〕に近い一種の中舌母音に響く場合が多い。北京官話の〔uai〕（外・怪・快・懷等）に對應する韻は、安嶺屯方言では〔uAi〕である。

臻攝の合音に於て、困〔k'uen〕屯〔t'uen〕春〔tʂ'uen〕順〔suen〕などの〔e〕は、安嶺屯方言では、北京官話の場合よりもずつと明瞭である。もつとも、速く發音される際には、〔uə〕の形になることも無いではない。なほ、北京官話で〔u(e)n〕の音である倫・輪・論の類は、安嶺屯方言では〔len〕である。

次に、雲・君・旬・薑等、すべて北京官話の〔yn〕に對應する韻は、安嶺屯音では皆〔yin〕の形になつてゐる。（雲・韻・運・閏・潤などの如く頭音の無い場合には、殆ど〔ɥin〕に近く響く。）カールグレン氏に據れば、この種の形は、四川・南京等の方言にも見出される（河南省の懷慶では〔yin〕といふ。

山攝・咸攝に於て、見〔tʃien〕天〔t'ien〕便〔bien〕などの〔ien〕韻は、安嶺屯方言で　北京官話の形と大體同じことであるが、眼・染・檢・點・臉など上聲の場合には〔iæn〕に近く發音される傾向があり、眼・染のやうに頭音の無い場合は殊に著しい。又、詩を吟ずる際には、上聲以外の音節でも、〔ian〕と發されるのが常である。

月落烏啼霜滿天。　ye luo u ti suaŋ man tian

江楓漁火對愁眠。　tʃiaŋ foŋ y xuo dui tʃ'ou mian

此地別燕丹　tʃ'i di bie ian dan

次に、北京官話の〔ɕye〕に對應する音節の中で、雪・穴は安嶺屯方言でもやはり〔ɕye〕であるが、靴・血は〔ɕie〕である。もつとも、血には、北京でも〔ɕie〕といふ俗音も行はれてゐる。又、北京官話で〔uan〕の音を持つ所の

卵。亂等は、安嶺屯方言では〔lan〕である。

果攝その他一般に北京官話の〔uo〕韻（多・奪・左・坐・羅・落・說等）に對應する所には、安嶺屯方言も亦大體〔uo〕韻を現してゐるのであるが、波・婆・破・摩・末・莫・墨・默・佛など唇音の場合には、安嶺屯音はすべて〔o〕韻（〔bo〕〔pʰo〕〔mo〕〔fo〕）である。又、鐸韻の半舌音の一部（洛・落・樂など）は、安嶺屯音では各〔luo〕〔lo〕兩音に呼ばれる。

假攝その他一般に北京官話の〔A〕韻（八・琶・馬・打・塔・那・臘・偿・擦・撒・机・茶・殺・法・髮等）・〔iA〕韻（家・恰・下・鴨等）・〔uA〕韻（瓜・誇・話・瓦等）に對應する所には、安嶺屯方言は各〔a〕韻・〔ia〕韻・〔ua〕韻を現してゐる。卽ち、末尾の母音は、北京官話の音や東京のアの音に比すれば、口の開きが一層大きく、響が一層深いのである。（もつとも、〔iɤ〕の場合は、いくらか淺く發音される傾向がある。）

北京官話に於ては、覺・藥兩韻に屬する多くの語根が、〔iau〕〔yo〕〔ye〕など種々の形で現れてゐる。これらの中、〔iau〕と、〔yo〕の前身たる〔io〕とは、共に中原音韻・西儒耳目資の時代から存在した形であるが、〔ye〕は比較的新しく發生した形であるらしい。而して、〔io〕は西儒耳目資では最も普通な形であるけれど、その系統を引く〔yo〕は現代北京官話では極めて稀であり、既に大部分は〔ye〕に變化してしまつてゐる。同一語根が〔iau〕〔ye〕二つの形を有する場合、兩者の間には通常文體的な區別が存し、又ごく少數のものに於ては更に一層明瞭な意義上の使ひ分けが存在する。覺・藥兩韻に屬する語根の例を若干擧げると

覺		tɕye
角	tɕiau（語音）	tɕye（讀音）

雀　ɕɕʻiɑu（語音）　ɕɕʻyɛ（讀音）

樂　yɛ（音樂）

獄　yɛ

學　ɕiɑu（效也）　yɛ

以上覺韻の例。右は國音常用字彙（中華民國教育部國語統一籌備委員會編、民國二十二年版）に據つて記したのであるが、他の北京官話字書には、この外、樂・獄に對して〔yo〕の音をも記してゐる。學は、學究・學習などの場合には〔ɕiɑu〕と讀み、學堂・學士などの場合には〔ɕyɛ〕と讀む。覺は、睡覺（眠る）の場合には〔ʃʒiɑu〕と讀み、「感する」意味の場合には〔ʃʒyɛ〕と讀むのであるが、前者は去聲系統の音であつて、入聲覺韻系統の音ではない故、右の表には擧げなかつた。

藥　iɑu（語音）　yɛ（讀音）

約　yɛ

鑰　iɑu（語音）　yɛ（讀音）

脚　ʃʒiɑu（語音）　ʃʒyɛ（讀音）

却　ɕɕʻyɛ

虐　nyɛ

略　lyɛ

以上藥韻の例。右も國音常用字彙に據つたのであるが、他の北京官話字書には、この外、約に對して〔iɑu〕〔yo〕の

音をも記し、略に對して〔liau〕の音をも記してゐるものがある。

然るに、安嶺屯方言では、覺・角〔ʒʒyo〕雀〔ɕ'yo〕樂・嶽〔yo〕學〔ɕyo〕（以上學韻）藥・約・鑰〔yo〕脚〔ʒʒyo〕却〔ɕ'yo〕虐〔yo〕（以上藥韻）の如く〔yo〕韻が最も普通な形であつて、ただ略のみ〔ye〕である。（嚼・較及び睡覺の覺は〔ʒziau〕であるが、いづれも去聲系統の音と思はれる。學には〔ɕyo〕がすべての場合用ゐられる。）但し、都會には角・脚〔ʒziau〕雀〔ɕ'iau〕學〔ɕiau〕藥〔iau〕のやうな形が行はれてゐるので、それらの形でも通じないわけではない。

朝には、北京官話では〔ʂuo〕〔tʂuo〕兩音有るが、安嶺屯音は〔ʂuo〕である。濁は北京音〔dʐuo〕安嶺屯音〔dzuo〕である。（以上學韻）勺（杓）の北京音は、國音常用字彙に據れば、話音〔ʂau〕讀音〔ʂuo〕である。安嶺屯にも〔ʂau〕〔ʂuo〕二樣の形が存し、杓子は〔ʂau dzl〕とも〔ʂuo dzl〕とも呼ばれる。弱は北京音〔ʐuo〕である。安嶺屯音は〔yo〕であるが、都會には〔iau〕の形も聞かれる。（以上藥韻）

北京官話に於ては、梗攝二等の入聲に屬する多くの語根が〔au〕〔o〕或は〔ɯ〕〔uo〕兩樣の形を持つてゐる。國音常用字彙に據れば

摘	dʐau（語音）		dʐo（讀音）
宅	dʐau（語音）		dʐo（讀音）
伯	bau（「大伯子」稱夫之兄）		buo
柏	bau（語音）		buo（讀音）
白	bau（語音）		buo（讀音）

百 baɪ（語音） buə（讀音）

拍 pʰaɪ（語音） pʰuə（讀音）

麥 maɪ（語音） muə（讀音）

但し、原本には〔bɔ〕〔pʰɔ〕〔mɔ〕と書いてあるものを、本稿では〔buə〕〔pʰuə〕〔muə〕と書き改めた。

安嶺屯方言では、摘・宅〔dzə〕伯・柏・白・百〔bɛ〕拍〔pʰɛ〕麥〔mɛ〕が最も普通な形である。〔dzʌɪ〕〔bʌɪ〕〔pʰʌɪ〕〔mʌɪ〕のやうな形は、都會風である。

北京官話に於ては、曾攝一二等の入聲に屬する多くの語根が、〔ɤ〕〔ɔ〕・〔ɤɪ〕〔uɔ〕・〔aɪ〕〔ɔ〕など各兩樣の形を持つてゐる。國音常用字彙に據れば

黑 xɤɪ（語音） xə（讀音）

得 dɤɪ（應當・必須） də

肋 lɤɪ（語音） lə（讀音）

賊 dzɤɪ（語音） dzə（讀音）

北 bɔɪ（語音） buə（讀音）

色 sɤɪ（語音） sə（讀音）

側 tsʰɔ, dzə

側に對しては、他の北京官話字書には、右の外になほ〔tsʰaɪ〕の音を記してゐるものもある。得は、應當・必須の意に於ては〔dɤɪ〕と上聲に讀まれ、獲得・可能の意に於ては〔dɔ〕と陽平に讀まれる。

安嶺屯方言では、黒〔xə〕得〔də〕肋〔ə〕賊〔dzə〕北〔bə〕色〔ə〕側〔dzə〕が最も普通な形である。得は、應當・必須の意に於ても、獲得・可能の意に於ても、共に〔də〕と上聲に呼ばれる。黒〔xei〕得〔dei〕賊〔dzei〕北〔bei〕の類は、都會風な形である。

安嶺屯方言に於て、流攝その他に現れる〔ou〕韻（偶・口・後・都・頭・樓・洲・手・謀等）の〔o〕は、獨逸語の Kopf の o に近い音である。北京官話の場合とは違つて、少しも〔ö〕に近づく傾向を示さない。

安嶺屯方言に於て、流攝その他に現れる〔iu〕韻（優・由・有・右・九・休・紐・六等）の〔i〕〔u〕は、共にかなり舌の位置の高い tense な音である。且、四聲を通じて、その發音に大差が無い。北京官話で之に對應する重母音は、遙に開いた lax な音であり、陰平・陽平〔iu〕上聲・去聲〔iou〕のやうに發音される。

なほ、個別的の問題として、牛が〔niug〕努が〔nog〕（努力〔nog li〕）であることには注意すべきである。

北京官話では「我的」「他的」などと言ふ風に助辭として用ゐられる的を〔də〕と發音するが、安嶺屯方言には此の形が無く、この場合にもやはり普通の〔di〕（目的〔mu di〕など）の形が用ゐられる。北京官話では「沒有」などと言ふ場合その沒に〔mei〕（陽平）の形を用ゐるが、安嶺屯方言には此の形が少く、この場合にもやはり普通の〔mə〕（去聲）（日沒〔i mə〕など）の形が用ゐられる。もつとも、〔mei〕の形を用ゐても理解されないわけではない。

北京官話では、和が「……と……」の意味を表はす場合、特に〔xan〕の形を用ゐるが、安嶺屯方言には此の形が無く、この場合にもやはり普通の〔xə〕をしか用ゐない。又、北京官話では、還が「なほ、未だ」「又」の意味を表す場合、特に〔xai〕の形を用ゐるが安嶺屯方言には此の形が無く、この場合にもやはり普通の〔xuan〕をしか用ゐない。

去の安嶺屯音は北京音と同じく〔ɕɕ̩〕であるが、なほ俗語では〔kɔ̃〕（去聲）といふ形も「行く」といふ意味を表すに用ゐられてゐる。支那語學報創刊號所載荒基氏の論文に據れば、〔kɔ̃〕の形は漢口あたりにも行はれてゐるらしい。

以上擧げた所の諸點を除けば、安嶺屯方言の音の狀態は、北京官話の場合と大差が無いやうである。

以上は、要するに、被調査者たる潘さん一人の發音を假に代表者として、安嶺屯音の特色を觀察したものである。併し、この種の音が果してどの位の廣さの地域に行はれてゐるものであるか、その點については私は何ら知る所が無い。（潘さんの話では、兎に角、自分の部落の人々は全部かういふ音で話してゐる、又、近隣の部落の言葉もこれと大差は無いやうだ、といふことであつたが。）故に、果して之を安嶺屯音と稱し、安嶺屯方言と呼ぶことが適當であるかどうかについては、未だ疑無きを得ないのである。本稿は、勿論不完全ながら、恐らく未だ餘り研究されてゐなかつた山東系の一方音を紹介して、この方面に興味を持たれる方々の御參考に供する、といふ程度の輕い意味を以て書いたものに過ぎない。

終に、使用した音聲記號について若干の說明を附け加へておかう。本稿で〔b〕〔d〕〔ḍ〕〔ɟ〕〔g〕を以て表した音は、カールグレン氏や趙元任氏の說く通り、非出氣性の "mi-sonrd" である。但し、發音のし樣により、比較的清んで聞える場合もあれば、比較的濁つて聞える場合もある。〔ʒ〕〔z〕〔ʐ〕〔ʑ〕を以て表した者は、實は〔s〕〔z〕類の音ではなくて〔ʃ〕〔ʒ〕類の音である。〔ʐ〕〔ʑ〕は、日本語のシ・チの頭音とかなり類似してゐる。母音記號〔ɿ〕〔ʅ〕は、いづれもカールグレン氏の記號を借用したものである。〔ɿ〕は〔ɨ〕の狹窄を緩めた音、〔ʅ〕は〔ɨ〕の狹窄を緩めた音である。

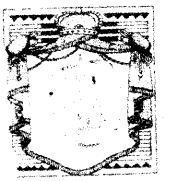
昭和十九年七月十五日　印刷
昭和十九年七月二十日　發行

國語音韻史の研究

(檢)定價七圓八十錢
特別行爲稅相當額七十錢　合計　八圓五拾錢

(一四五〇部)

出文協承認 あ460208



著者　有坂秀世

東京都澁谷區大和田町四十二番地

發行者　清水達夫

東京都京橋區銀座四丁目四番地

印刷者　北川武之輔

印刷所　(東東六〇)　細川活版所

東京都神田區淡路町二ノ九

配給元　日本出版配給株式會社

發行所

東京都澁谷區大和田町四十二番地

明世堂書店

振替東京八三九三三
電話澁谷三八〇二
會員番號一三四〇一一